未来（みらい）への種（たね）まき

大分県
麻生（あそう）　恒雄（つねお）

私は満70歳、全盲の鍼灸マッサージ師です。年に一回、学校で障害者についての講話を続けています。きっかけは、小学校教師の友人から、目の見えない人がどのような生活をしているのか、点字を書いたり読んだりはどうしているのかなどについて、学校で生徒に話をして欲しいと依頼されたからです。さて、引き受けたのは良いものの何をテーマに話そうかと悩みました。その当時、毎週グランドソフトボールという視力障害者が行う球技の練習のため、片道1時間かけて自宅から練習会場まで一人で電車で行っていました。

ある日、駅構内の自転車置き場にうっかり迷い込んでしまい、駅の入り口がわからずウロウロと狭い範囲を行ったり来たりしていました。すると小学校低学年の男の子二人が

「おいちゃん、どうしたん？」

と声をかけてくれました。

「駅に行こうと思って来たんだけど道に迷ったみたい」

と言うと二人は

「おいちゃん、こっち・こっち」

と階段まで案内してくれたのです。

「地獄で仏」

とはまさにこのことで、とても嬉しく思いました。

「そうだ、このエピソードを話そう」

と決めました。何度かこの話しをしてみると子ども達からは

「このような手助けなら私にもできそう」

という反応でした。これ以降も、小学校のみならず中学校・高校・大学で話をする機会をいただくようになりました。その度に

「困っている人を見かけたら、是非声をかけて欲しい」

と生徒・学生に必ず伝えています。そのためには視力障害者の毎日の過ごし方や困っていることを知ってもらうことも必要だと思い、私のありのままの生活を話してきました。

普段私はスマートフォンを使ってラインで友人とのコミュニケーションを楽しんでいます。視力障害者がどうやってスマートフォンを使っているのか不思議に思うかもしれませんが、画面操作に対応した内蔵の音声アプリが使えるので何とか利用できています。また紙幣の識別は、千円札のマークと横幅の長さを基準にした方法で金額を判別していましたが、今年の7月に発行された新紙幣では、わかりやすくなった統一の識別マークと、その場所の違いで簡単に判断できるようになりました。そして缶入りのアルコールには点字がついており、自分の缶ビールと孫のための缶ジュースを間違いなく冷蔵庫から取り出せます。このように社会の配慮が以前より広がっていることを、とてもありがたく感じています。

しかし家族の協力や自分自身が工夫することで多くのことができても、やはり困ることはまだまだたくさんあります。知らない所では、トイレの位置や駅の改札口がどこにあるのか迷います。一人で移動するときには、音声信号が少なく、また、電車で空いた座席がわからないことなども不便に感じています。まずはそういった実情を子ども達に知ってもらうことで、街中でも

「あの人は困っているかもしれない」

と気がつくことに繋がれば良いと思っています。そして、困っているような人を見たら

「何かお手伝いできることがありますか？」

と勇気を出して声をかけることが鍵だと話しています。そして、目が不自由な人への介助の方法はまさに「手引き」ですが、半歩斜め前に立ち、自分の肩か肘を相手に持たせて、先導すれば良いことを説明しています。その際、目隠しをした人と介助者役の二人一組で歩行を体験してもらっていますが、正しい介助だと目隠しをしていても、恐怖を感じないようです。手助けはけっして難しくはないのです。

もうひとつ子ども達に話していることはパラリンピックについてです。私はセーリング競技で過去2回出場し、障害の違う仲間3人で、お互いのハンディを補いながら世界で戦いました。風の方向は両耳に当たる左右差で判断し、声を掛け合いながらの帆走でした。これまで競技や開会式、選手村の食堂の様子などパラリンピックの話をすると、子ども達の目が輝いているように感じました。少ない練習時間をカバーするために、練習ノートを書いたり、英会話がもっとうまくできたら海外の人との会話が弾んで、もっと楽しかっただろうという話は先生も生徒も集中して聞いてくれました。若い人に夢や目標を持って努力してもらいたいと伝えることも私の役目だと思っています。

学校訪問を始めてまもなく30年を迎えようとしていま

す。私一人のためでなく、社会全体が助け合いの心を持つようになることが希望です。何歳までできるかわかりませんが
「継続は力なり」
を信じて少しでも多くの味方を増やしたいです。困っている人に声をかけて欲しい、そして夢や目標を持って欲しい。この2つを軸に学校で生徒とのふれあいを大切にしながら、未来のための種まきをこれからも続けたいと思います。

一般区分　優秀賞

マサちゃんのこと

千葉県
津嶋（つしま）　栄子（えいこ）

「マサちゃん、起っきして。ごはんだよう。」

声の主は、叔母である。マサちゃんは、叔母の息子。私にとって従弟にあたる。

マサちゃんは自閉症で、重度の知的障害がある。

マサちゃんと会話するのは難しい。いくつか単語は発するけれど、その数少ない単語は、本当の意味とはつながっていないことが多かった。でも、マサちゃんが見えるものや感じるものと、そのアトランダムな単語の選択は、どこかつながっていたのかもしれない。私はマサちゃんの表情を見て、楽しそうだなとか、何だかストレスが溜まっているみたいと思うのがせいぜい。だが、叔母はマサちゃんに話しかけ、マサちゃんは「うん、うん。」とうなずき、ちゃんとコミュニケーションは成立していて、私はいつも羨ましく思っていた。

マサちゃんは時々、激しくジャンプしたりしゃがんだりを繰り返しながら「うおーっ!」と大きな声を出すことがあった。何かしらの感情を吐き出しているのか、不安定になった心を落ち着かせようとしているのか・・・。そんなマサちゃんを初めて見る人は驚いたり怪訝な顔を向けたりする。びっくりさせちゃうことはあるけれど、マサちゃんは決して人に危害を加えるようなことはしない。

時折り、マサちゃんは楽しそうにケラケラ笑うこともある。「うおーっ!」の理由がよくわからないように、ケラケラ笑う理由も、私にはわからないのだけど、本当に楽しそうに、とても無邪気に可愛くマサちゃんは笑う。

私の家族の中でも、マサちゃんはアイドルだった。私の両親や妹たちも、マサちゃんがお盆やお正月に来るのをとても楽しみにしていた。マサちゃんが来る日は、いつもマサちゃんの大好きな手巻きずしを作った。みんなマサちゃんに好かれたくて、手巻きずしの他にもマサちゃんが喜びそうなおもちゃやお菓子を用意した。自分が用意したものをマサちゃんが気に入ると、宝物を掘り当てたみたいに得意になった。「うおーっ!」が思い切りできるように、海にも遊びに連れて行った。

私の妹の誕生日に、マサちゃんが来た時のこと。みんなが「ケーキのいちご争奪ジャンケン」で白熱しているそばで、最後のいちごをマサちゃんがパクっと食べてしまい、みんなで大爆笑したこともあった。

それからだいぶ時間が経った。マサちゃんは大人になり、最近は親元を離れてグループホームで、優しい所員さんたちに囲まれて穏やかに暮らしていた。そして。

令和五年のお正月が明けたある日、マサちゃんは、グループホームで突然バタンと倒れて、それきり亡くなった。少し前に感染した「コロナ」の影響で、肺血栓症を併発したらしい。あまりに突然の訃報だった。

叔母に葬儀の日程を聞くと、葬儀はマサちゃんの家族（両親と姉）三人だけで行いたいとのことだった。「これまでずっと迷惑ばっかりかけて、人に嫌われる人生だったから、最後は三人で静かに見送りたいんだ。」と。

それでも、私はどうしてもマサちゃんに会いたかったので、葬儀の前日、マサちゃんのいる斎場に行った。叔母も一緒に来てくれた。

マサちゃん、享年四十八歳。叔母は、もうすぐ八十歳になる。近年腰を患った叔母は、杖代わりのカートを押しながら、祭壇に眠っているマサちゃんのそばにゆっくり近づくと、「マサちゃん、起っきして。ごはんだよう。」と声をかけた。悲しそうではなく、ごくごく普通に。五十年近く、叔母とマサちゃんは、優しいお母さんとかわいい子供のまま・・・。

叔父も、決して健康とは言えない状態である。叔父も叔母も、自分たちがいなくなった後のマサちゃんが心配でしかたなかったから、先に亡くなったマサちゃんを「親孝行」と言った。自分でもよくわかってないんじゃないかと思うくらい急に逝ってしまったマサちゃんは、とても穏やかな表情で眠っていた。

私は教員になって、約三十年。マサちゃんの影響で、特別支援教育の道に進んだ。マサちゃんがいなかったら、今の私はない。「迷惑ばっかりかけて嫌われる人生」なんて、叔母ちゃん、何言っちゃってるの。マサちゃんは、私の人生の恩人なんだよ。

「障碍のある人とない人のあたたかいふれあい」がたくさん生まれる一方で、偏見や根拠のない誹謗中傷は、当事者だけが見える陰の中に、実はまだ確実にはびこっている。

世の中にはいろんな人がいるけれど、マサちゃんや叔母たちを含めてみんなが、安心して心穏やかに暮らしていける社会になるといい。それは、とてつもなく難しい願いだとはわかっている。だけど、私は決してあきらめない。それが、生きている人間の使命だと思うから。

一般区分　優秀賞

個性を受け入れる教育の挑戦

青森県
米塚　匠

「先生、ぼく、『普通』になりたい。」

これは、私の心を強く突き動かし、その後の人生観を大きく変えた一言である。

私は小学校の教員をしている。その中で、実に多様な児童と接してきた。勉強が得意な子がいれば苦手な子もいるように、活発で話し好きな子がいれば控えめでおとなしい子もいる。人はそれぞれ違う個性をもっており、百人の子どもがいれば百通りの個性があるのも当然である。個性に違いがあっても、優劣の差はない。たくさんの子どもと関わる教師として、すべての個性を大切に受け入れ、その成長を支えていくことが自分の務めだと、そう思いながら、これまで子どもたちと向き合ってきた。

しかし、本当に私はすべての子の個性を大切に、そして前向きに受け入れてきたのだろうか。そう思わされ、もう一度見つめ直さなければいけないと感じるきっかけとなったのが、先述した「ぼく、『普通』になりたい」という言葉だった。

この言葉は、私の学級に在籍していた、発達障がいを抱える男の子がふと口にしたものだ。その子は、学校生活の中で頻繁に落ち着きを失い、他の子どもたちと衝突することがよくあった。授業中に突然立ち上がって教室を飛び出すこともあった。そのたびに私は彼を指導したり、追いかけて教室に戻るよう説得したりしていた。私は、この行動が正しいものだと思っていた。しかし、今改めて考えると、それは単なる私の思い込み、もしくは自己満足でしかなかったのではないかと感じる。私はただ、学級全体の集団行動を整えることばかり意識しており、一人ひとりの子どもの本質を理解しようとしていなかった。頭では「個性を大切に」と思っていても、それを実行できていなかったことに初めて気がついた。結局、その子に対して無意識のうちに「普通」ではない接し方、悪い意味での「特別扱い」をしてしまっており、その子もそれに気づいていたのだと思う。「ぼく、『普通』になりたい」という言葉には、私が理解しきれなかった

深い孤独と不安が隠れていたのだと痛感した。

その日の休み時間、彼と個別に話す時間を取った。すると彼は、「どうしてぼくだけ違うんだろう」と泣きながら話した。私は、胸が締め付けられる思いがした。同時に、今の自分のままではこの子の心を癒やすことはできないと感じた。もっと正面から、そして心の底から本気で向き合い、「彼そのものの個性」をはっきりと理解した上で、その良さを認めてあげなければ。彼の本音に触れ、私はそう強く感じた。

その後、彼とのコミュニケーションを見つめ直し、彼の気持ちに寄り添う努力を続けた。彼の興味や好きなこと、嫌なことをより細かく把握するために、彼との対話を重ねた。また、彼が授業中に困難を感じる場面についても、学級全体でどのようにサポートできるかを考え、環境を調整することを試みた。彼の意見や提案を尊重し、時には彼の気持ちを代弁するような役割を担うことで、彼が自分の存在をより大切に感じられるように努めた。すると、少しずつ彼との心の距離感が縮まっていったような気がした。

それから数ヶ月後、私の異動が決まり、彼と別れることになった。その際、彼から手紙をもらった。そこには、「ぼくは、今まで何度も叱られたけれど、先生はぼくをちゃんと見て、心から叱ってくれました。叱られるのは嫌だけど、少し嬉しかったんです。」と書かれていた。私は、涙が溢れてきた。彼との向き合い方が間違っていなかったと、少しだけ自信をもつことができた。そして、これからも一人ひとりの個性を大切にすると誓った。

彼の言葉、そして彼の存在から、多くのことを学ばせてもらった。その中で私が今感じていることは、無意識に根付いている偏見と向き合う必要性だ。最初の頃は「この子はどうせできないから」というような偏見が、私の中で無意識にあったのだと思う。そこに悪意はないのだが、似たような偏見をおそらく多くの人が無意識にもっていると感じる。そしてそれは子どもも同じである。だからこそ、私はこの偏見をなくすための教育を実践したいという思いが強くなった。

しかし、この教育を実現するのは簡単ではない。例えば、「障がい」というテーマそのものに触れるのが難しいという問題がある。このこと自体が無意識の偏見の表れであるが、アプローチを誤ると、逆に障がいを抱える子を傷つけてしまう可能性がある。例えば、知的障がいを抱える子が在籍する学級で、その子の特性も理解しないまま「あの子は障がいがあるから大変だ、みんなで支えよう」と伝えても、かえっていじめを助長してしまうことがあるし、本人が「話してほしくなかった」と感じてしまうこともある。だからこそ、障がいをみんなで

理解し受け入れるには、「その子の本質を理解しようとする、認めようとする姿勢と意識」が大切だと改めて思う。教師としてどのような教育ができるか、周囲に対してどのようなアプローチが適切かを見極めるために、その子の心と真剣に向き合うことが必要だ。

今、私にはとある目標がある。それは、目の前の子ども一人ひとりを大切にし、彼らの個性を伸ばしていくと心に誓いながら、将来的には学級や学校の枠を越え、市町村、県、そして日本に生きるすべての子どもたちが安心して過ごせる学校環境をつくる、とういうものだ。この目標は途方もない夢物語であると思われるかもしれない。しかし、私はこの目標をこれからももち続けると心に決めた。そしていつの日か、障がいを抱える子もそうでない子も、全員が笑顔で安心して生きることができる社会を実現させたい。